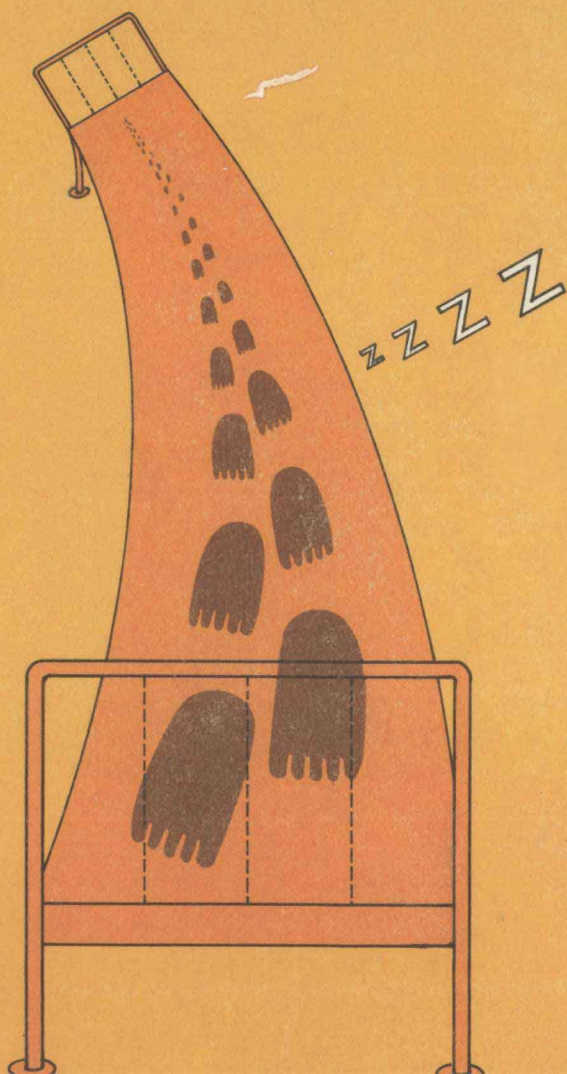
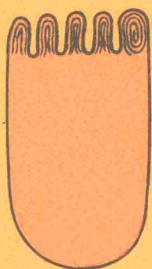


明日の明日の夢
の果て 小松左京



の明日の夢
の果て 小松左京



角川書店

明日の明日の夢の果て

定価六四〇円



昭和四十七年十一月三十日初版発行
昭和四十七年十二月十五日再版発行

著者 小松左京

発行者 角川源義

印刷者 橋本伝四郎

製本者 宮田四郎

発行所 角川書店
かどがわしよてん

東京都千代田区富士見二〜一三〜三

郵便番号一〇二

振替東京一九五二〇八

電話東京(二六五)七一一一番へ大代表

明日の明日の夢の果て
目次

| | |
|------------|----|
| 炬燵の中の月 | 7 |
| ふかなさけ | 13 |
| 月のしのぶ | 19 |
| 人魚姫の昇天 | 35 |
| 空のゆきずりに | 40 |
| 告白 | 43 |
| プライベート・マナー | 46 |
| こちら"生きがい課" | 55 |
| こちら"アホ課" | 60 |
| こちら"二十世紀課" | 66 |
| 持ち出し通貨 | 72 |

黒いクレジット・カード

85

おみやげブーム 110

おちてきた男 117

レジャー地獄 127

公明選挙 133

土地と土 139

セックス・プレイヤー 152

ハレンチの果て 175

ZOTV騒動記 196

キチガイ日本 219

明日の明日の夢の果て 242

装丁

岡本信治郎

明日の明日の夢の果て

小松左京作品集

炬燵の中の月

いい正月だった。

三が日は、うらうらと晴れわたったあたたかい日がつづいた。元旦、二日とこともなくすぎ、三日目、妻子はお正月映画を見に出かけていってしまい、彼一人茶の間の掘りごたつに脚をつこんで、縁先きからさしこむ日の光りをぬくぬくとあびながら、こればかりは正月の亭主の特権である、昼酒をちびりちびりとなめていた。隣の家からラジオの謡曲がきこえてきた。——「鶴亀」らしいが、声はとぎれとぎれで、大鼓おおづと小鼓だけが冴えてひびいてくる。

いい気持ちだわい、と思いつながら、彼はこたつに脚をつつこんだまま、ゴロリと横になった。目だまりに香箱かうばこをつくっていた雄猫のひげをひっぱると、迷惑そうな顔をし、のっそりと立ち去る。猫の行ってしまったあとに、テレビのリモコン・スイッチがあった。手いたずらにパチンと入れると、いやに荒れた画面がうつり出す。暗い所に、ゴツゴツした岩山のようなものがひろがっており、白っぽい服を着た人間が、二、三人動いている。

「ただいま月面からの中継をお送りしています」と、スーパーがはいる。——画面が半分ワイ

プされて、日本のアナウンサーの顔がはいつてくる。

「アメリカ、およびソ連の第三次月探検隊は、昨二日あいついで月面に到着いたしました」とアナウンサーはいった。

「このテレビは、アメリカの探検隊が月の上から、ケーブケネディの宇宙基地へおくってきたものを、さらに通信衛星による宇宙中継でお送りしております」

ああ、そうか、と彼は肘まくらをしながら思った。たしかゆうべ、着陸したんだったな。

「探検隊は、ごらんのように、月面上の地形や地質をしらべております——つづいて到着する第四次探検隊とともに、月面上の最初の宇宙基地を設営するために、適当な場所をさがしている、とのことです……。ちょっとおまちください」

テレビの画面の中で、月面上の割れ目の中にもぐっていた宇宙服の男が、手をふって何かいった。——びんびんわれた英語が、ひびいた。

「ただいま、月面上から通信がはりました。割れ目の底に、なにか光のようなものが見えるといっているようです。——ええと、これは、どういうことでしょうか？　先生……」

「そうですね。——螢光物質かなんかがあったのかも知れませんが」と、アナウンサーと同席している天文学者がこたえる。

「ハウンド中佐がもぐってしらべるようです」とアナウンサーはイヤホンで耳にあてながらいう。やっとなるな、と、彼はうとうとしながら思った。いや、けっこうけっこう。がんばってくれ。その時、突然、掘りごたつの底の方で、ゴツゴツという音がきこえた。——彼はびっくりして

とびおきた。蒲団の裾をめくって、中をのぞきこむと、赤外線ヒーターががくがくゆれている。やがてそれが横にぐーっともち上がり、下からまんまるい頭がニュッと出た。

「な、なんだ！」と、彼はさげんだ。

「どこのどいつだ！——人の家の掘りごたつの底をぬくやつは？」

まるい頭の男は、キョロキョロ上を見まわしているようだった、とうとう掘りごたつの中から、四畳半の茶の間にはい出してきた。——まるい頭と思つたのは、宇宙用のヘルメットだった。宇宙服を着たその男は、プラスチックのぞき窓の中から、仰天したように青い眼を光らせた。

「ココハ……地球カ？」と、ヘルメットの顔をおいをおずおずとはね上げたその男は、呆然としたように英語でつぶやいた。「信ジラレン……」

「ああ……うう……ハッピー・ニューイヤー……」と彼はうろおぼえの英語を大急ぎで思い出しながらいった。「あなた、誰です？」

「私ハ、アメリカ第三次月探検隊ノハウンド中佐……」と、宇宙服の男はいった。

「ハウンド中佐？」彼は眼をむいて口をパクパクさせた。「そ、それじゃ、たつたいま、あのテレビにうつってた……月面の割れ目の中にはいつて行った……」

「ソウ……月ノ割レ目ノ底ニ、赤イ光ヲ見ツケテモグッテミタ。……ソシタラココへ出タ」ハウンド中佐はテレビをのぞいて、これも口をパクパクさせた。「アレダ！ マチガイナイ。イマアソコニ月面ガウツッテイル。アソコニ私ノ仲間ガイル。私ハタッタ今、アノ割レ目カラモグッテキタ。ココハ本当ニ地球カ？」

「まちがいない……ここは地球の日本で……ここは私の家だ」と彼はいった。

「いったい、なんだってこんなことになったんです？」

「ワカラン。——キット、空間ノユガミデ、三十八万キロハナレタ月面上ノ割レ目ノ底ト、コノ家の床下ガツナガッテイルンダ」ハウンド中佐は首をふった。「大発見ダ——地球カラ、苦勞シテ宇宙ヲワタッテ行カナクトモ……ヒトマタギデ月ヘ行ケル。キミ、コノ土地ヲ、ゼヒアメリカヘ売ッテクレ」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！」と彼はあわててさげんだ。「この土地は長いこと貯金してやると手に入れたんだ。まだ月賦を全部はらってないんだ。簡単に売れるもんか！」

「シカシ……コレハ君、人類ノ宇宙ヘノ發展ノタメダ」

「知っちゃいないよ。そんなこと！」と彼はどなった。「なるほど宇宙へ行くのは、人類にとってすばらしい事だろう。だけど、そのために、おれがやっとな手にいれた、ささやかな幸福を犠牲にしなきゃならない必要はないはずだ」

「ウント高ク買ウ——アメリカハ金持チダ」

「いくら金をつまれたって、気にいったものは売りたくないよ。絶対にいやだ」と、彼は首をふった。「それに——こんなに安直簡単に月に行ける道がある、ということがわかったら、今までアメリカヤソ連が、月へ行くためにつきこんだ猛烈な量の金と技術と努力はどうなるんだ？ まるつきりムダになっちゃうじゃないか？——君たち、何のために大勢の中からよりぬかれ、くるしい訓練をつんできたんだ？ そんなもの、まるで無意味になっちゃうじゃないか。——へた

すると大統領の首がとぶぜ」

「オオ……」ハウンド中佐はうめいた。

「本当だ……ワレワレノヤッタコト……アノ巨大ナ宇宙開発予算システム、スベテナンセンスニナル……」

「だから、あんたたちはやっぱり、少し——三十八万キロほど遠まわりして、でかいロケットで、月へ行きなよ。大げさにやった方が、アメリカの経済も発展するしさ。——こちらの方はだまつていてやるから……」

「ホントニ……秘密ニスルカ？」

「するとも。日本男子は約束は死んでもまもる」と彼は見得を切った。

「だから、あんたの方もおれのささやかな平和のために秘密にしといてくれ。へたに日本の役所になんかおれると土地強制収容とか何とかうるさくてしょうがないから……」

「ジャ、ソウシヨウ」と、ハウンド中佐は考え考えいった。「仲間ニモ、ダメッテイヨウ。私ハコノママ月ヘカエル」

「待てよ！」また掘りごたつの中にもぐりかけたハウンド中佐へ、彼はどなった。「人の家へ土足ではいってきて、そのままかえる気か？ 泥を掃除してってくれ。それから、掘りごたつの底もちゃんとしといてくれよ」

宇宙服を着たハウンド中佐が、台所からもってきた雑巾で、窮屈そうに足あとをふくのを見ながら、彼はチビチビ酒をのんだ。——中佐は手をふって、また掘りごたつの底へもぐりこみ、セ

メントの底をはめた。テレビの画面を見ると、中佐がまた月面上の割れ目から出てくるのが見えた。

「ハウンド中佐が出てまいりました……」とアナウンサーはいった。「別に何もなかったようです」

やれやれ、と思いながら、彼はまたうとうとした。——そして、かえってきた子供たちのにぎやかな声で眼をさました。

「誰もこなかった？」と細君はいった。

「こなかったよ」と彼はうそをいった。

「のんびりしたい正月だ」

この家の床下が月に通じているなどということを知ったら、細君はきつと大さわざして、アメリカ航空宇宙局に、高い値で売りつけるだろう、と思ったからである。

ふかなさけ

このパチンコ、いやによく出るな、と思った時は、受け皿はいっぱいになっていた。パネをはじくのをやめても、玉はジャラジャラとあふれつづける。指令カメラの前にたつて、

「故障だ」

といつてもとまらない。——彼はしかたなく、入口の所でマネージャーをよんだ。

「おかしいですね」とマネージャーは台に近よりながらいつた。「台の管理は全部コンピューター・サービスを通じてやっていますから、故障ならランプがつくはずですが」

マネージャーが、ばねをはじくと、別に故障はない。はいらない玉は出てこない。——ところが、彼が前に立つと、はいりもしないのにまた玉がザラザラ出てくる。——

「変だな」とマネージャーは首をふった。

「昔、パチンコ屋で女の店員をつかっていた時は、恋人がくると、裏から細工して玉をどんどん出したそうだね」

「昔の話ですよ」と老人はいった。「今じゃ人件費があがって、パチンコ屋なんかじゃ人がや

とえやしません。だからコンピューター・サービス・ネットワークに加盟してるんですが……」

「まあいいや、こちらをやるよ」

彼は電子スロットマシンの方へいった。——昔のスロットマシンとちがって、これもお客と店のどちらもあり損をしないように、当りをコンピューター・ネットワークが配分してくれる。

彼がロッドをさげると、いきなりジャックポットが出た。二度目もそうだった。三度目も……。
「かえってください！」とマネージャーは頭をかかえていった。「あなたにやられちゃ破産しちゃおう！」

次の日——

彼は会社の食堂で、いつもの通り昼食自動販売機の前に立っていた。給料前で、あまり贅沢はできない。彼は、識別カードをいれ一番安い定食のボタンを押した。ところが——シュートからガチャンと出てきたのは、おそろしく豪華な特Aステーキ定食だった。彼がポカンとしてみると、隣りで重役が妙な顔をして、こちらをのぞいていた。

「まちがえたらしいな」と重役がいった。「こちらは特Aを押しなのにC定食が出た」
異変はまだまだつづいた。

午後、彼はいきなり部長によべれた。ほかの重役二、三人と専務がいた。

「君はすばらしい成績をあげている」と専務がいきなりいった。「私たちは、今まで全然気がつかなかった。しかし今日、定期考査をやったら、君は何と目標を二百三十パーセントも達成し